

## 二 出 雲 人

新聞のスクラップ帖をめくっていたら、以前、朝日新聞島根版の連載企画「交遊抄」に書いた拙文が見つかった。私はその冒頭のところに、次のように書いている。

私は子どもころから、人に注意されたり、批判されたりすることを好まなかった。もちろんだれだつて同じだろうが、私は極端だった。

人から嫌な言葉を聞かないようにするには、人にも嫌なことを言わない、そのためには、人との付き合いにあまり深入りしないこと、そんな哲学をいつしか身につけてしまったのである。だから私は、人と交遊する場合、いつでも一定の距離を置いていたように思う。こんな調子の交際の中から、お互いに傷をなめ合うような、真の友情は生まれるはずがない。要す

るに、自分を傷つけられたくないという気持ち（エゴイズム）が、何物にも優先していたのである。

これに輪をかけたのは、優柔不断さである。私はイエスカノーをはっきり言わない。いや、はっきり言えない。ノーと言うことによつて、相手が失望し、不快感を表し、反論してくることが怖いのである。相手を傷つけないというより、自分が傷つけないためである。——以下略——（昭和六十年九月十一日）

読み返してみて、これこそ出雲人の典型、ド出雲人だなあと、改めて思いなおして吐息をついた。斐川町の田圃の真ん中で生まれ、今もそこに住んでいるのだから仕方があるまい。

そのド出雲人の私が、出雲地方の地域史を多少研究するようになり、また近年、市町村の事業に参加する機会を得るようになってくると、出雲人の気質気風について強い関心をもたざるをえなくなつた。